

## 国内経済情勢

### 概 観

設備投資や輸出が増加傾向をたどっているほか、個人消費も底固く推移しているため、1～3月の生産・出荷は大幅増加を示した。

4月の商品市況をみると、非鉄、天然繊維が海外安から続落し、条鋼類も流通・ユーザー筋の買控えなどから小反落を示すなど、ひと頃に比べれば騰勢は鈍化しているが、末端実需の増勢持続、メーカーの値上げ姿勢の根強さ等を映じて商況全般としては堅調に推移した。4月の卸売物価は、電力・ガスの大幅値上げや鋼材の建値引上げに加え、石油製品、化学製品等でも原料高の製品価格への波及が進行したため、国内品を中心に前月上回る大幅上昇となった。4月の消費者物価(東京)は、季節商品(野菜)の反落にもかかわらず、電気・ガスの値上げが加わって大幅上昇を示した。

金融面では、市中貸出の抑制などを映じて、1～3月のマネーサプライの伸び率は前四半期に比べ鈍化し、3月の全国銀行貸出約定平均金利も大幅な上昇を示した。

3月の国際収支をみると、経常収支(貿易収支・季節調整後)が赤字幅を拡大し、長期資本収支も流出超に転じたことから、総合収支の赤字幅は前月をかなり上回った。4月の為替相場は、中旬以降急速に円高化した。

#### 1～3月の生産、出荷はともに高い伸び

3月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比\*、速報)、同出荷(速報)は、うるう年の影響もあって著増した前月(各+5.7%、+5.3%)の反動から、それぞれ-2.7%、-4.5%と減少した。もっとも、1～3月通計では、生産、出荷は前期比各+4.4%、+3.6%と前四半期(各+2.6%、+2.9%)を上回る大幅な伸びを示した。この間、3月の生産者製品在庫(速報)は+0.8%と引続き増加した。

\* 以下増減率は特に断わらない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

1～3月の財別生産、出荷の特徴をみると、資本財輸送機械の生産、出荷が船舶の輸出反動減を主因に伸び悩んだものの、一般資本財(金属加工機械、産業用電気機械、事務用機械)の生産や耐久消費財(カラーテレビ、ビデオテープレコーダー、二輪自動車等)の生産、出荷は輸内需の好調を映じて大幅増加を示した。また生産財(プラスチック、アルミ地金、自動車部品等)、建設財(小棒、H形鋼、アルミドア、板ガラス等)についても、一部品目における流通・ユーザー筋の若干の在庫増しも加わって生産、出荷ともかなりの増加となった。

この間、製品在庫の面では、生産財が出荷増から引続き減少したものの、一般資本財、耐久消費財等は生産の高水準を背景に増勢を続けた。

国内最終需要の動向をみると、3月の公共事業契約額(前年比)は、前年が施行促進の反動から低水準であったことも影響して+40.7%の大幅増加

となった(前月+41.2%)。一方、4月の公共事業請負額(前年比)は+7.2%の増加となった(前月+1.0%)。

設備投資動向については、3月の機械受注額(船舶、電力を除く民需)は-1.8%の減少となったが、1～3月通計では製造業からの受注増を主因に+2.2%と前四半期著増(+15.7%)のあとも増勢を続けており、前年同期比でも+21.4%とかなり高い伸びとなった。また3月の建設工事受注額(民間分、速報)も-26.5%と5ヵ月ぶりに減少したが、1～3月通計では+21.3%とかなり高い伸びを示した(前年同期比+31.6%)。

消費面では、3月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は春物衣料品の出足がやや不ぞえのほかは総じて好伸したため+11.0%と3ヵ月連続して2けた台の高い伸びを示しており(前月+11.2%)、4月に入ってからもおおむね堅調な地合いが続いた模様である。また耐久消費財の売行きをみると、4月の乗用車新車登録台数(軽を除く、前年比、速報)は-5.6%と高水準の前年をやや下回った(前月+1.3%)が、家電製品はカラーテレビ、ビデオテープレコーダー、ステレオ等を中心に好調に推移した。

雇用情勢をみると、3月の有効求人倍率は0.75倍と前月(0.78倍)比やや低下し、完全失業率も1.90%(前月1.78%)となったが、常用雇用(全産業)は+0.1%と小幅ながら前月(+0.1%)に続き増加している。

#### 卸売物価は大幅上昇

4月の商品市況をみると、非鉄(亜鉛、鉛)、天然繊維等が海外安から続落し、条鋼類(小棒、H形鋼)も流通・ユーザー筋の買控えなどから小反落を示した。しかし、石油、合繊、セメント、鋼

板類(薄板)、白板紙、無機薬品(か性ソーダ)等は国内需給の引締りや原料コスト高を背景に上昇しており、商況全般としては堅調に推移した。

4月の卸売物価は+2.7%と前月(+2.0%)を上回る大幅上昇となった(前年比+24.0%)。品目別には、主として海外安から非鉄、金属素材が下落したものの、電力・ガスの大幅値上げや鋼材の建値引上げに加え、石油製品、化学製品等でも需給引締りのなかで原料高の製品価格への波及が進行したため、国内品を中心に続伸した。

4月の消費者物価(東京、速報)は、季節商品(野菜)が反落したものの、電気・ガスの値上げに加え、年度替りに伴う授業料の改訂などから+1.6%と大幅上昇を示し、前年比では+7.6%の上昇となっている(前月同+7.3%)。

#### 3月の貸出金利は既往最大の上昇

4月の金融市場をみると、銀行券は234億円の発行超(前年同3,174億円)となり、月中の平均発行残高(前年比)は+10.0%と前月(+10.4%)に続き2けた台の伸びとなった。一方、財政資金は、一般財政が公共事業費、地方交付金等を中心に前年を大幅に上回る払超となったほか、国債発行額、外為会計の揚超幅も前年比縮小したため、33,092億円の大幅払超(前年同20,564億円)となった。このため、月中の資金余剰額は32,442億円(前年同18,086億円)となったが、日本銀行は手形オペレーション等によってこれを調整し、市場の需給地合いは小締り気味に推移した。

こうした状況下、コール・レート(無条件物、中心レート)は月央以降強含みに推移し、結局月中+0.25%の上昇となった(月末12.375%)。また手形売買レート(2山越)も月中+0.0625%上昇した(月末13.5625%)。

3月のマネーサプライ伸び率( $M_2 + CD$ 平残、前年比)は+10.6%となり(前月+10.8%)、1～3月中平残は+10.6%と市中貸出の抑制などから四半期平残としては2年ぶりに10%台の水準に落ち着いた(10～12月+11.2%)。この間、全国銀行貸出約定平均金利は、最近の相次ぐ公定歩合引上げを背景に上昇テンポを速めており、3月は+0.438%と月中としては既往最大の上昇を示した(前月+0.136%)。

4月の公社債市況をみると、上旬中は軟調に推移したが、中旬以降は米国長期金利の低下や円高等を契機として証券会社の玉手当が積極化し、個人、外人などの買い引合いも増加したため、急反発商状を呈した。また株式市況は、金利先高感の後退や円高などもあって物色人氣が強まり大幅高となった(東証指数、月末467.81、月中+13.35)。

#### 為替相場は急速に円高化

3月の国際収支をみると、前月著増した輸出の反動減などから貿易収支季節調整後の経常収支は2,441百万ドルと前月(1,497百万ドルの赤字)を大幅に上回る赤字となった。この間、長期資本収支も海外金利の高騰や円安相場等を映じた対内・対

外証券投資の流出などから3か月ぶりに流出超となり、総合収支の赤字幅は2,530百万ドルと前月(同840百万ドル)比大幅に拡大した。

3月の輸出(通関、ドルベース)は、自動車、合繊糸・織物が2月著増の反動から減少し、家電製品(テレビ、テープレコーダー)、鉄鋼なども船繰り難などから落込んだため、-6.4%とかなりの減少を示した(前月+7.9%)。数量ベースでは引続き増加傾向にあるが、当月の前年比伸び率は+14.4%とやや伸び悩んだ(前月同+23.2%)。

一方、輸入(通関、ドルベース)は、原油が価格高騰から増勢を続けたものの、食料品や木材が減少したため-4.0%の減少となり(前月+10.5%)、数量ベースでも3か月連続して前年水準を下回った(前年比-8.2%、前月同-2.3%)。

4月のインターバンク米ドル直物相場は、上旬中は円安傾向をたどったが、米国金利の天井感が強まった中旬以降は海外市場においてドルが主要通貨に対し全面安となるなかで、急速に円高化した(月末238円80銭、月中11円40銭の円高)。

(昭和55年5月13日)